資料5-2
科学技術・学術審議会　学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第17回）
令和５年７月２５日

人間文化研究機構における Digital Humanities

堀　浩一（人間文化研究機構）

Q1. 何故 DH?
Q2. 誰が？
Q3. 何を？
Q4. どうやって？

科学技術・学術審議会学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第１７回）
令和５年７月２５日

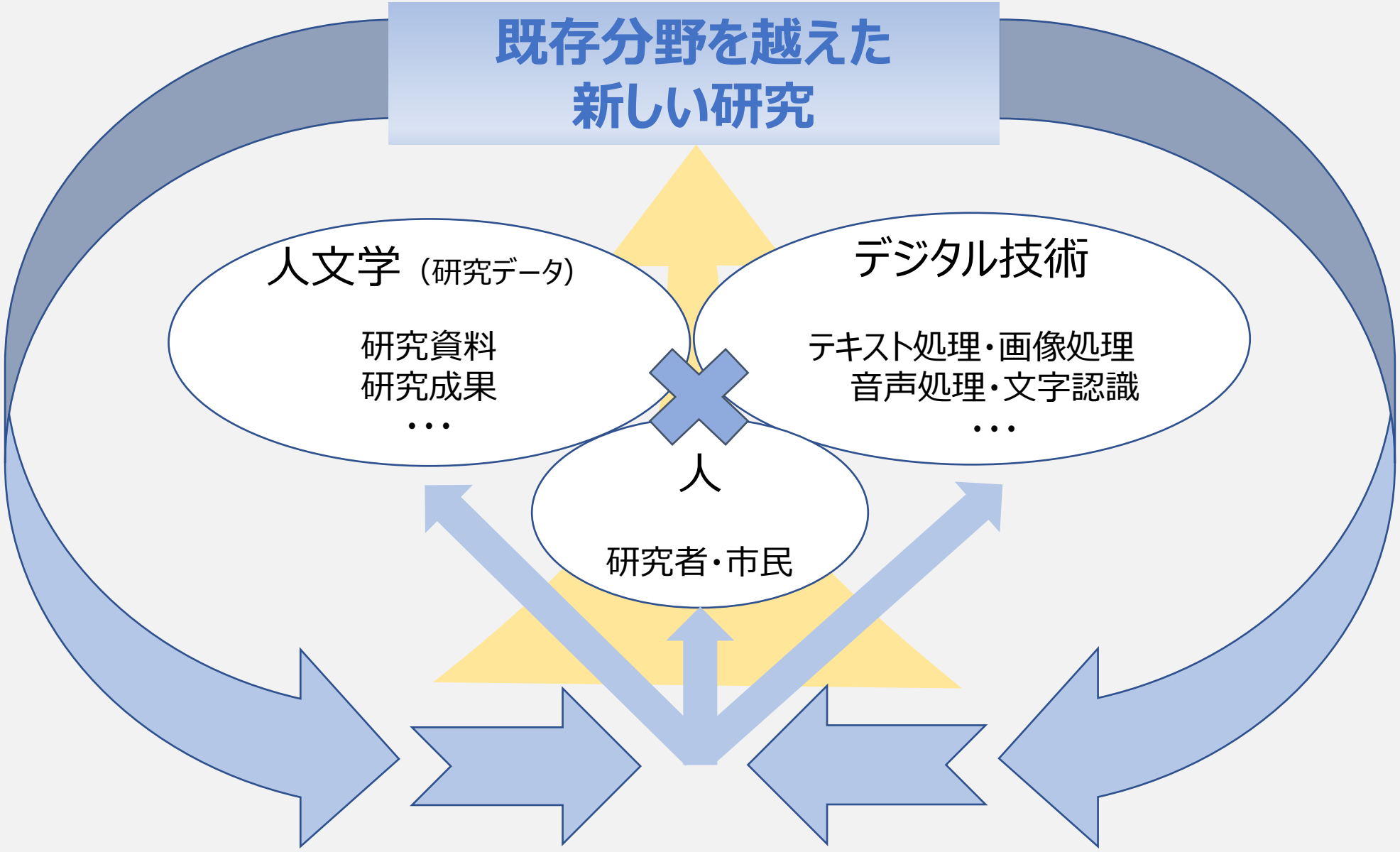
A1. 何故 DH?

- DHの定義は、
  狭義(「人文学研究へのディジタル技術の適用」)から
  広義(「健全な市民社会を支えるための人文学の再構成」)まで、
  さまざま

- 基本的には、「人文学がますます面白くなるなら何でもやる」

- 細分化されがちな分野の間が(文理を越えて)つながる。

デジタル・ヒューマニティーズ（DH）



A2. 誰が？

・人間文化研究機構DH推進室

（令和5年度発足。専任の特任教授1名、特任准教授3名、機構内兼務教員9名、合計13名）

第一世代（情報学出身）　:4人
第二世代（人文学出身）　:4人
第三世代（最初からDH）:5人　からなるチーム構成（予定）

・遠くない将来に第四世代？ すなわち、ほぼすべての人文系研究者が普通にDHを駆使するようになり、DHは特別のことではなくなる。

・大学や研究所の研究者と連携し、また、市民とも連携しながら。

A3. 何を？

- FAIR ideal
  Findable, Accessible, Interoperable, and Reusable という理想

- Findable and Accessible については、nihuBridge 6 Institutional Database LinkIntegrated search

- Interoperable and Reusable については、nihuBridgeでAPIを提供しており、ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)やJapan SearchやNII CiNii Researchなどとも協力しながら、相互運用可能性、再利用可能性を高めようとしている。さらに、今後、各大学とも連携したい。

A4. どうやって？

- おそらくは、中央集権的システムでは、DHは、うまくいかない。全国、全世界に広がる、自律分散システムのネットワークを構築する必要。人間文化研究機構は、ネットワークの一つのHUBとなるべく、DH事業を推進していく予定。

（人文機構では）

・情報基盤システム nihuBridge のさらなる展開

・DH推進に係る普及啓発活動（研究会、各種シンポジウム等）

・権利処理問題に関するハンドブックと事例集の作成　（準備中）

・DH教育講座（動画）などの取組　（準備中）

（課題）

- DHを全体的に推進するための機関・大学による連携・協力体制が必要
- 全国的なDH人材の育成に向けた取組が必要不可欠
- DH推進に係る諸課題の整理・対応（例：分野や機関を越えたデータ連携）

デジタル・ヒューマニティーズ（DH）の促進（まとめにかえて公開資料）

人文機構では、2022年度から6年間の重要課題としてデジタル・ヒューマニティーズ（DH）の推進を掲げています。

DH について、人文機構では、人文学の様々な分野・手法にデジタル技術を適用・応用する研究分野であると同時に、他分野の研究者や社会の人々が集まり、横断的に議論し、新たな研究領域を共創する場や関連する研究基盤を含めた総体であり、次世代に向けた知の創成の基盤であると位置付けています。2023年度にはDH 推進室を設置し、国際的に進展する取組みのなかで、人文機構も役割を果たしていきます。